

先週はパウロの終末論を学んだのでした。ところが16章になると話が現実に戻り、「エルサレム教会の信徒のための募金」となっていて、パウロはやはり今の教会の現状を忘れることなく、しっかりと諸教会の動向を見据えていたのです。このころ、ADの50年代はエルサレム教会では大変な事が起こっていたのです。辺り一帯作物が成長せず、大飢饉が襲っていたのです。聖書には度々飢饉が発生してユダヤ人がエジプトに移住したり、ルツ記ではナオミがイスラエルを離れて家族でモアブに移住することが書かれています。使徒言行録11章28節にはこのようにあります。「その中の一人のアガポという者が立って、大飢饉が世界中に起こると霊によって予告したが、果たしてそれはクラウディウス帝の時に起こった」とあります。丁度この時、エルサレム教会が危機に見舞われたのです。パウロは言います。16章の1節「聖なる者たちのための募金については、わたしがガラテヤの諸教会に指示したように、あなたがたも実行しなさい。」と教えました。パウロは、エルサレムの貧しい兄弟たちを助けるために、献金を送ろうと熱心に働いていました。わたしが思うに教会の特色は何ですか、と問うた時、他の教会や世間を見渡して広く献金することです、と答えます。世界は知らないけれど、特に日本の教会は総じて大体は貧しいのではないか、と思います。でも貧者の一灯という言葉があるようによく教会は献金していると思います。そのように初代教会から始まった伝統は今日も受け継がれているのです。ここにあるエルサレム教会は、最初に立てられた教会です。主イエスが最後の晩餐をする時に二階の広間を借りて、そこで夕食を弟子と共にしたのですが、その二階の広間がやがてエルサレム教会になったのです。ですからすべての教会の母なる教会なのでした。主の兄弟ヤコブがその教会の指導者となっています。パウロは献金の方法を教えています。2節を読むと、「各自収入に応じて、幾らかずつでも手もとに取って置きなさい」と。週の初めの日、礼拝の時に献金を集めておいて、会計担当が積み立てておき、ある程度まとまったら、パウロが訪問した時に渡してエルサレムに届けるということなのです。パウロは今エフェソでこの手紙をしたためているのですが、エフェソから船で対岸のコリントへ行く方法もあるのですが、パウロはマケドニアの北を經由して地中海を通り、コリントに行くと言っています。コリントでは場合によっては冬を越すことになるかも知れないと言っているのです。9節を読むと「わたしの働きのために、大きな門が開かれているだけではなく、反対者もたくさんいるからです」とパウロは言っていますが、そのような困難を予測していくわけですから、パウロの心境はどのようだったでしょう。ユダヤ人にとって海は魔物が住むと考えており、恐れられていました。ユダヤ人は海が嫌いだったので。海は穏やかな時はいいのですが、けれど、ひとたび荒れると怖いですね。そのような海をパウロは伝道のため4回も渡ったのです。命がけで旅をしたのです。海で思い出すのは、昔、イギリスの豪華客船タイタニック号が沈んでしまった事件がありました。少々話の本筋から離れますが、私は映画を見て感動したことがあったので話してみたいと思うのです。あのような立派な豪華客船がなぜ座礁したのか、と思います。そのことはさて置きまして、船が傾いて水が浸入すると、お客は救命具を着て小舟に乗るのです。でも人数分はないので乗れない乗客は仕方なく甲板で待機します。その時司教らしい人が現われて、人々を車座（大勢が円形になって座ること）に座らせ、皆で主の祈りを唱えたのです。そこを見て感動しました。人々は死が近いと断念したのでしょうか。それで一心に主の祈りを祈ったのです。そのこともある意味ではその人の終末ですね。マラナ・タ（主よ、来たりませ）です。そして、もう一つ感動したのは音楽家が残っていて、全員ではなかったと思いますが、船が沈む中、演奏をしたのです。少しは心が安らぐようにと弾いたのでしょう。ヴァイオリンだったと思います。そこも感動しました。きっとそのような人達のためボートは用意されていたと思うけれど、乗らないで演奏したそのプロ根性に脱帽しました。怖くなってさっさと舟に乗る人もいたけれど、中にはそのような人もいたのです。時々思

い出します。パウロの海の旅も途中暴風が吹いて座礁の危険を感じたけれど、パウロの知恵で水夫に指示を与えて船旅を続けたのでした（使徒言27章）。大きな門とありますが、福音伝道のチャンスが到来したという意味です。エフェソは今で言うとトルコにあります、エーゲ海を挟んで対岸はアテネとコリントがあるのです。このトルコにはパウロたち使徒が伝道し、3世紀ごろには15か所の教会が立てられ、イエス・キリストの福音が土着化して、多くの人々が信じるようになりました。そして、第1回のニケア会議も開かれてエフェソは大きな門となったのです。しかし、大きな門が開かれると、今度は逆に反対する門も開かれます。まず、異教徒が反対しました。デメトリオという名の銀細工師です。エフェソはそのころ、政治、文化、宗教の中心地でしたので、イエス・キリストの福音に対する反発が激しかったのです。エフェソにはアルテミスという大きな女神が建てられており、その神殿を中心に経済が回っていたのです。パウロは「手で作ったものなどは神ではない」と言って大胆に伝道したので町中大騒ぎになったのでした（使徒言19:21~40）。もう一つは、ユダヤ主義による妨害です。ユダヤ人の大祭司アナニアはパウロを総督に訴えた事件がありました。「この男は疫病のような人間で、世界中のユダヤ人の間に騒動を引き起こしている」と告発しました。ですから、猛烈な勢いで主の福音を排斥して騒動を起こしたのです（使徒言24:1~9）。しかし、パウロは逃亡することなく、エフェソ滞在を延ばして勇敢にキリストの十字架の福音を説いたのです。

パウロは迫害と戦いながら危険に遭いながらも、テモテやテトスという弟子と共に、そして、多数の信徒の方々と共に労苦し福音を伝えるのでした。伝道者はどんなに有能でも一人では伝道出来ません。パウロの伝道の友はアキラとプリスカでした。盟友はペトロや他の使徒たちでした。そして、テモテやテトスや多数の信じる群れが祈り支えました。10節にテモテを気遣っています。「テモテがそちらに着いたら、あなたがたのところで心配なく過ごせるようお世話ください。わたしと同様、彼は主の仕事をしています」とあります。11節にも「誰も彼をないがしろにしてはならない。わたしのところに来る時には、安心して来られるように送り出してください。わたしは、彼が兄弟たちと一緒に来るのを、待っているのです」とあるように、自分の息子のように労わっているのです。恐らくパウロがコリントの一部のクリスチャンたちから快く思われなかったために、テモテにわかりやすく言うと八つ当たりするのではないかと懸念したのではないかと想像するのです。前週にも触れましたが、コリントの教会にはパウロを支持する信徒たちも多くいましたが、グノーシス派という世にも奇怪な人々が入り込み攪乱していたのでした。そのあおりを食ってテモテが、もしや理不尽な待遇を受けるのではないのかと親心で心配したのではないかと思うのです。テモテはパウロの名代として派遣されているのですから、そのことを踏まえて待遇してもらいたいと手紙で書いたのです。「だれも彼をないがしろにしてはならない」と書き添えています。次に、アポロについて言及しています。12節「兄弟アポロについては、兄弟たちと一緒にあなたがたのところに行くようにと、しきりに勧めたのですが、彼は今行く意志は全くありません。良い機会があれば、行くことでしょう」と言っています。コリントの教会から、アポロ先生はなぜ来てくれないのかと、問われたのでしよう。行く気がないのは、コリントの教会が何派、何派と派閥があるので、そのような教会には行く気がしなかったからではないでしょうか。コリントの教会が目覚めて悔い改めれば行くことになるでしょうと、パウロは言っています。そして、13節に「目を覚ましていなさい。」と教えます。信仰は次第にマンネリになりやすいですね。うっかりすると神さまの御愛を忘れて、恵みが当たり前に思ってしまう。そこに、ふっと魔が差します。サタンはいつも狙っているのです。その人の弱いところを見つけて入り込むのです。いつも目を覚ましている。それには祈ることではないでしょうか。教会に通うキリスト者は祈りがなければやっていけません。何が本当なのか、真実なのか、見極めて歩むには祈りが欠かせないのです。

パウロはこの手紙を締めくくるに当たって、同労者たちに感謝の言葉を述べます。ここにパウロ先生の人柄が表れています。どの手紙にも末尾に祝福と祝祷が留め置かれています。それは、パウロだけではなく、他の使徒も同じですが。15節以下を読むとステファナの一家、フォルトナト、アカイコ、アキラとプリスカが出てきま

す。パウロは今までお世話になった人々を思い出し気遣っています。「兄弟たち、お願いします。あなたがたも知っているように、ステファナの一家は、アカイア州の初穂で、聖なる者たちに対して労を惜しまず世話をしてくれました」と感謝します。ステファナの一家はクリスポとガイアと共にパウロがコリント伝道をした時、パウロ自ら洗礼バプテスマを与えた数少ない人です。パウロはステファナの家の人たちにも洗礼を授けましたが、それ以外には誰にも授けた覚えはありません、と言っています。この3人がステファナ、クリスポ、ガイアがコリントの教会からパウロ宛に手紙を持っていったのではないのでしょうか。ステファナの一家はアテネやコリントを含むアカヤ地方で最初に救われた家族であり、コリントの教会の礎となったのです。そして、北にあるマケドニアで初めてクリスチャンホームになったのは紫布の商人リディアの一家なのでした。ステファナの一家は何くれとなく兄弟姉妹の世話をして家の教会を守って来たのでした。ですから、コリントの教会の人たちはステファナの一家に協力して尊敬し従ってほしいと語っているのです。フォルトナトはどのような人なのかは不明ですが、アカイコは奴隷であり信徒だったので。この3人は仲介役になってコリントの教会のもめごとをパウロに相談し支持を仰いでコリントの教会に伝えていたのです。この仲介役は大事な仕事です。宗教で言うと、仲介役の原型は祭司なのですが、主イエス・キリストは神と人間との間を取り持つ大祭司だとヘブライ書には書かれています。私たちにイエスさまという大祭司が与えられており、神の右に座して人間のため執り成しの祈りをしてくださっているのです。次に、アキラとプリスカの夫婦の名があります。この2人は新約聖書に6回名がありますが、パウロを大変支えました。アキラは夫でユダヤ人、プリスカは奥さんで相当身分の高い裕福なローマ人であったとされています。文献によると、2人はクリスチャンになり、同じ天幕の仕事をしている関係上、パウロと意気投合し伝道したと言われていました。奥さんのプリスカはヘブライ人への手紙を執筆したのではないか、プリスカは流浪の人であり、海の旅をしているので船に詳しいこと、ユダヤ教の神殿を良く知っていること、ヘブライ書がギリシャ語で書かれていてプリスカのように教養のある女性だったら可能性があるとしています。彼女は初代教会第一級の知識人であったと言われていました。家庭の主婦として家業を助け教会の良き働きをしたのでした。

最後にマラナ・タ主よ、来てくださいと言って、パウロは主の来臨を待ち望んでいます。聖餐式の式文にも「主の再び来たり給うを待ち望む」とあります。しかし、主は今ここにお出でくださっています。我らの真中に七里教会の只中におられるのです。マラナ・タはアラム語で我らの主よ、来たりませという意味なのです。この言葉は初めエルサレム教会で用いられ原語のまま、異邦人教会に伝えられた主の来臨を祈る言葉です。パウロのコリントの教会に対する献金の依頼は手紙二で学びます。春の天候に反して主のご受難が迫ってきます。何かドキドキするではありませんか。気持ちの重い日々ですが、マラナ・タと祈りつつ過ごしたいと思います。